

AR CA DIA

53

SUMMER 2012

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース

[アルカディア]



MI
OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

眼の極楽 四人の姿かたちを描く

館長 榊原悟

(承前)図に掲げたものが、それである。見ての通り「涅槃図」(本法寺蔵)である。絵師の「自画像」であるはずもない。それを敢えて「自画像」と強弁するのは何故なのか。だが、それについて述べる前に、あらかじめ「涅槃図」そのものについて触れておく必要があるだろう。

云うまでもなく「涅槃図」は、中インド・拘尸那揭羅城外、跋提河西岸の沙羅双樹の下で涅槃に入った釈尊と、それをとり囲むようにしてその死を悼み、悲嘆にくれる仏弟子はじめ菩薩や天部、鬼畜、そして生きとし生ける動物たちまでも描く。陰暦二月(現在は三月)十五日、まさしく釈尊入涅槃のその日、寺の本堂の壁面高くこれを掛け、絵解きする。そうであればこそ中川乙由(二六七五―一七三九)は、

涅槃まで花も笑ひをこらへけり(『麦林集』)

と、この日までは桜さへも咲うのを控えた、と吟じたのだろうし、逆に、

ねがはくは花の下にて春死なん そのきさらぎのもち月の頃(『山家集』)

と詠んで西行(二二七〇―九〇)は、沙羅双樹ならぬ満開に咲く桜の下での入涅槃を願ったのだろう。実際に西行は、その願い通り、文治六年二月十六日亡くなった。

いや、そもそも釈尊の値打ちとは、

仏もし大晦日に入滅し玉ば、いかに仏とも貪着すべき、かかる世話しなき衆生の為には、往生もふのもの(運のもの)なるべし

仏とは桜の花に月夜哉(『五元集』)

と榎本其角(二六六一―一七〇七)が云うように、二月十五日、桜の花の咲く頃合いの、月夜の晩に入滅したからこそであり、これが、もし大晦日に入滅しようものなら、衆生は忙しさに追われ、涅槃会どころの騒ぎではないだろう。それにつけても「花に月」とは、何ともいいものだ、というのが句意である。それを「仏とは」と上五で大上段に構えたところに、其角のユーモアのセンスを見る。花に月―西行ならずとも、もし死ぬのならば、そんな美しい季節の、美しい頃をと願うのは人情と云うもの。涅槃会は、その如月の望月の頃に修せられる。

ESSAY

その涅槃会の折掛けられる「涅槃図」の遺品は多い。各寺院で厳修される涅槃会の数だけある、と云っても過言ではない。それらはいずれも大幅になる。

なかでも東福寺の吉山明兆(二三五二―一四三三)描くところの一本(応永十五年・四〇八)、大徳寺の狩野松栄(二五二九―九二)の二本、そして掲出した本法寺の長谷川等伯(二五三九―一六一〇)描くところの二本(慶長四年・二五九九)は、「三大涅槃図」と称せられ、とりわけその巨大さが京童たちの話題となったもの。等伯の『涅槃図』に至っては、歿後四百年の二〇二〇年東京国立博物館の平成館で展示されたが(『長谷川等伯展』)、平成館のあの大壁面でも掛かり切らず、やむなくその下部二メートル程は台の上に平置きされていた、と記憶する。表装まで高め高さ十メートル、幅六メートルに及ぶとなれば、当然だろう。

しかし、明兆のそれは、その等伯画をも凌ぐ。掛軸の概念を大きく超える大きさだが、そう云えば、明兆が東福寺に遺した仏画類は、どういう加減か超大作が多い。さしずめ『五百羅漢図』五十幅の大連作(そのうち四十五幅が東福寺に現存。二幅は根津美術館の所蔵)が、それである。永徳三年(三三八三)から三年以上の歳月を費やして完成したが、その期間、明兆は故郷淡路へ帰ることが叶わなかったため、母に自らの姿を描いて贈つたとされる「自画像」(模本)が遺されている。その挿話自体泣かせるが、画像もそれに相応しく、その生真面目でひたむきな青年僧の姿が、実にいい。最初期の「自画像」として、「人の姿かたち」をテーマとするこのエッセイからも一度は言及しておかねばならない作なので、ここで二言述べてみた。

さて問題の等伯「涅槃図」。慶長四年己亥歳(二五九九)四月廿六日、等伯自ら描き、願主となつて本法寺に寄進した。天文八年己亥歳(二五三九)生まれの等伯はこの年六十一歳、還暦を期しての積善であった。実はこれより一ヶ月前の閏三月廿六日、はせかわと申す物かき候として、大なるしやかの多御めにかくる。(『御湯殿上の日記』)と、奉納に先立ち宮中で後陽成天皇の勲覧に供せられた。等伯にとってまさしく名譽の揮毫、それがこの『涅槃図』の制作であった。

いや、それだけではない。本図の制作は、等伯の生涯、それをわたしたちが見通す上でも劃期をなす一代の事業となった。むろん等伯自身も、そう思っていたはずだ。還曆という、記念すべき年に制作し寄進したことが、何よりそれを物語る。

が、さらに図を等伯が寄進した意味を知られば、これの制作が極めて重大な、まさにその人生の劃期をなしていたことが分かるだろう。本図裏面、等伯が京洛において最も恃みとした日通(本法寺住職、等伯はその肖像のみならず、母妙法尼の画像までも描いている。二五五―二六〇八)の筆になる銘文が記されている。そこには釈迦如来はじめ、日蓮聖人と祖師たちの名、本法寺開山日親上人以下歴代の住職、日通とその母の名の後、等伯の養祖父母、養父母、先妻、そして逆縁の息子二人と、等伯一族の名が列記されていた(等伯は能登畠山氏の臣奥村文之丞の子として生まれたが、幼いころ長谷川宗清道浄のもとへ養子に出された)。その銘文の当該部分のみだが掲げてみると、次の通り(括弧内は等伯との関係)。

- 浄松 (久蔵の弟)
- 道淳 (等伯息子久蔵)
- 妙浄 (等伯先妻)
- 祖母妙祐 (養祖父 号無文)
- 祖父法淳 (養祖父 号無文)
- 教行院日受 (養父 俗名宗清)
- 慈父道浄 (養父 俗名宗清)
- 悲母妙相 (養父 俗名宗清)
- 等伯 逆修 (等伯妻)
- 妙清 逆修 (等伯妻)
- 妙福 (妙清の母、日通の母の姉妹とも)

要するに、ここに名のある一族の人びとの菩提を弔い、併せて自らと妻との逆修(生前、元気なうちに法事を修し、自らの菩提を弔うこと)のために描いて寄進したものが、それが本法寺の『涅槃図』であった。

すでに文禄元年(一五九二)等伯は、時の最高権力者豊臣秀吉が、亡き息子鶴丸の菩提を弔うために創建した祥雲禅寺の障壁画(現智積院障壁画)を息子の久蔵と共に制

ESSAY

作。本来ならば当然狩野二門に命じられるはずのこの仕事を、巨匠永徳亡き狩野一門から奪い、これを成功裡に完成、絵師としての名声を得ていた。その功成り名遂げた男が、還曆を迎え一族と自らの来し方、行く末を思うのは、ごく自然な心の動きであるだろう。『涅槃図』の制作が人生の劃期をなすとすれば、まさしくそれ故であり、等伯の信仰のあかしであった。制作にかけた思いも一入であったはずだ。

その『涅槃図』が等伯の「自画像」？―むろん、わたしはレトリックでそう云っているのではない。この図の中に二人、得体の知れない男が描かれていることに着目しているからである。その男は仏弟子風を装っているものの、頭頂のみを禿げさせたデコ頭、濃い口ひげ、ゲジゲジの眉と、妙に実人的な面貌をもつ。他の仏弟子たちとは明らかに二線を劃した存在に見えるのだ。彼は、一体、誰なのだろうか。

実は以前よりこの男の存在が気になっていたわたしは、一昨年夏、勤務する大学の学生に、この男のことは何も伝えず、

―本法寺の『涅槃図』には、正体不明としか言いようのない人物が描かれているように見えるのだが、それはどの男か、検討してみたい―となるべく予断を与えないように、しかし、検討するに際しては、他の『涅槃図』に描かれた人物との異同を見ることを条件に、課題とした。その結果は、いまわたしが得体の知れないとした男が、やはりおかしい、ということであった。

当然である。その男は、管見でも他の『涅槃図』には全く登場しないと思われるからである。そしてこの男こそ等伯その人ではないか―いや、結論を急ぐことはあるまい。次回にその根拠と共にそれは述べるとして、まずはその男が『涅槃図』の何処に描かれているか、彼を捜すことを読者への課題としよう。目を皿にし、くまなく『涅槃図』を見つめる―それもまた『亦復一楽帖』(田能村竹田自画像)、『亦復一楽帖』(寧楽美術館蔵)、『眼の極楽』であるからだ。



長谷川等伯「涅槃図」本法寺蔵

徳川四天王 本多忠勝と子孫たち

—岡崎藩主への軌跡—

浦野加穂子

今回の展覧会で紹介する譜代大名本多家の礎を築いた本多忠勝は、天文十七年（一五六八）現在の岡崎市内に生まれた生粋の三河武士です。武勇の誉れ高く、徳川四天王の一人として、徳川家康の天下統一に大きく貢献しました。黒糸威の具足をまとい、鹿角の兜を頂いたその勇姿は、典型的な戦国武将像として広く知られています。

本多家は忠勝が上総大多喜に大名として取立てられて以降、伊勢桑名から播磨姫路、大和郡山、陸奥福島、播磨姫路、越後村上、三河刈谷、下総古河、石見浜田、そして三河岡崎まで十回に及ぶ転封を重ねながら、十六代にわたり譜代大名として幕府を支えました。その間、忠勝の子忠政は弟忠朝とともに大坂の陣で活躍し、その戦功により五万石加増されて譜代大名配置の最前線である播磨姫路十五万石に配され、西国への押さえとしての重責を担いました。さらに忠政の長男忠刻は徳川秀忠の長女千姫を妻に迎え、徳川将軍家との繋がりを一層深めました。しかしその後、四代政勝の跡目相続をめぐる御家騒動（九六騒動）が起こり、さらに七代忠孝の早世により所領が五万石へ減知されるなど、苦難の道をた

EXHIBITION

どりしました。

江戸時代後期の明和六年（一七六九）に、十一代忠肅が石見浜田より三河岡崎に転封となり、以後本多家は明治維新まで約一〇〇年にわたり岡崎藩主を務めました。岡崎時代の本多家は、これまでの度重なる転封による出費に加えて、東海道を往来する公的賓客の接待や、矢作川の水害による普請や年貢収納米の減少などによる支出が嵩み、藩の財政は逼迫していきました。このため十三代忠顕、さらに十五代忠民の代に、大規模な財政改革が断行されました。明治維新を迎え、老中などの幕府要職を歴任した忠民も、慶応四年（一八六八）には朝廷支持を表明、十六代忠直は明治二年（一八六九）の版籍奉還にもない、岡崎藩知事に任命されました。

新体制下で藩政改革や西洋式の軍制改革などが進みましたが、同四年の廃藩置県による岡崎県の成立にともしない、忠直は藩知事の任を解かれて東京居住を命じられ、岡崎における本多家の歴史は幕を閉じました。

この度十七代忠敬の次男忠次が分家の際に建てた邸宅が、東京から岡崎市東公

園内に移築、復原され、七月六日より公開されることになりました。今回の展覧会は、この旧本多忠次邸復原を記念して、譜代大名本多家二六〇年の歴史を辿るものです。本展では本多忠勝所用の黒糸威胴丸具足（重要文化財）をはじめ、同家ゆかりの名宝を一堂に会し、譜代大名本多家の全貌に迫ります。さらに本多忠次邸の設計図面や家具・調度類のデザイン画、そして忠次氏の住宅思想を育んだ当時の建築・住宅書などの貴重な資料の数々も特別公開します。

本展を御観覧頂くとともに、昭和初期を代表する近代建築である旧本多忠次邸にも、是非足をお運び頂き、維新後の本多家の姿に思いを馳せて頂ければ幸いです。



《本多忠勝画像》個人蔵(重要文化財)

会期：平成24年7月7日(土)～8月19日(日)

水野美術館コレクション名品展

近代日本画を 築いた巨匠たち

—横山大観から平山郁夫まで—

稲垣満春

水野美術館は、CMでも御馴染みのこの製造と販売を行っているホクト株式会社の創業者故水野正幸氏が長年かけて蒐集した絵画をもとに、平成十四年（二〇〇二）長野市に開館した近代日本画専門の美術館です。

明治・大正・昭和期に総称される近代は、日本美術史の上で大きな変革を迎えた時代でした。明治維新によって一気に押し寄せた文明開化の波は絵画の世界までも襲い、西洋化への道を押し進めることとなり、この急速な変化に戸惑い、目標を見出せなくなった当時の画家たちは混迷の二途を辿りました。この状況のもと、日本美術の衰退を危惧したアーネスト・F・フェノロサと岡倉天心は、日本古来の古美術の保護と新たな日本画を唱え、明治二十二年（一八八九）に東京美術学校（現東京藝術大学）を開校します。いち早く天心の考えに

横山大観《無我》1897年



EXHIBITION

共鳴した橋本雅邦を初代教授に迎え、狩野派など各派の伝統技と西洋画の手法を交錯させた新しい日本画の創造に向けた様々な試みがなされていきます。雅邦のもの

とには、横山大観、下村観山、川合玉堂、菱田春草らが集い、その活躍は後世の日本画に大きな影響を与えました。水野美術館のコレクションは、これら岡倉天心の流れをくむ近代日本画を系統立てて集められたもので、現在約四百点の作品が収蔵されています。特に、同じ長野県の飯田市出身の菱田春草については、郷土ゆかりの作家として蒐集に力を入れ、初期から晩年に至るまで三十二点を所蔵し、全国随一のコレクションとなっています。

このたび、水野美術館のご協力を得て、当館にて「水野美術館コレクション名品展 近代日本画を築いた巨匠たち」横山大観から平山郁夫まで」を開催するはこびとなりました。この展覧会では、横山大観、下村観山、川合玉堂、菱田春草ら近代日本画の草創期を支えた作家から、杉山寧、奥田元宋、加山

又造、高山辰雄、平山郁夫ら戦後の日本画壇をリードした作家を中心として、上村松園、伊東深水、橋本明治ら美人画の巨匠たちも含め、選りすぐりの名品六十点を展示いたします。いちばんのお薦めはなんといっても大観の初期の代表作『無我』（明治三十年）。花鳥風月が主流であった当時の日本画壇で、無垢な子どもの姿を通して無心の境地を表現したこの作品は、当時の画壇を驚愕させたばかりでなく、大観の名を不動のものとなりました。

なお、会期は九月一日（土）から十月二十一日（日）までとなっています。水野美術館のコレクションがまとまってご覧いただけるまたとない機会です。

近代日本画を築いた巨匠たちの名品とともに、秋の素敵な一日を岡崎市美術博物館で過ごしていただけたらと思います。

会期：平成24年9月1日（土）～10月21日（日）

美術専用車でめぐる集荷の旅、その宿はビジネスホテルが定番です。宿泊地を決めるのに一番大事なのが駐車場です。運送会社の支店がある町は良いのですが、それ以外はホテルの駐車場です。4t車が駐車可、もちろん鍵はかけますが、さらに後ろの荷扉が絶対開かないよう壁にピッタリ背面を着けられる駐車場のあるホテルを探します。これが意外に難しい。良い場所がないと集荷先から離れた別の町となることもあります。

ビジネスホテルなので夕食は簡単にすませることが多く、全国各地を飛び歩くわりにはあまり地元の名物料理に出くわすこともありません。当館学芸員には、大分で関鯖を鱈腹食べてくるのもいますが、かえって昼食に訪れる食堂や高速道路のPAの方が地元の特産品を食べられるようで、なかでも中国道でのワニフライには面くらいました。昼食で困るのは都会の方です。京都では車を止めるところもなく「苦労です。事前にスケジュールを調整、昼時には市内脱出を試みます。食事に困らなかったのが、「大古墳展」「平賀

源内展」でお世話になった香川県。歴史博物館(現香川県立ミュージアム)の学芸員に教えていただいたうどん屋の数は限りなく、コース途中には必ず讃岐うどんの名店があるのです。おいしくお徳に。そしてどこか懐かしく、地域の人々の心が浸み込んでいくようです。そんな四国で印象にのこっているのが坂出の鎌田共済会郷土博物館。規模は大きすぎますが、どうしても村上春樹の『海辺のカフカ』に登場する甲村記念図書館のイメージに重なってしまいます。鎌田は財団管で元は図書館、市街地にありながら静謐な独自の空間を生み出しています。ここでも多くの物語が繰り返されています。ようなにおいが染み付いていました。



鎌田共済会郷土博物館

COLUMN & TOPIC

展覧会感想

村松和明

一昨年、パリで十二万人を超える観客を動員した「オール・プリユット・ジャポネ展」では、日本の障がい者などの作品、約八〇〇点が紹介され、大きな反響を呼んだ。このような作品が日本の美術館で展示される機会は少ないため、今回の日本への巡回を大いに期待していた。

というのも、私はシュルレアリスム研究の延長上で、オール・プリユットやプリミティブアートといった純粹表現について学んでおり、二〇〇九年には、アジアの障がいの作品を集めた初の国際展「アジア・パラアート TOKYO」(財団法人日本チャリティ協会主催)のアドヴァイザーを命じられ、その立ち上げに参画するなどの活動をしてきたからである。パリでの冒頭の展覧会が話題をさらったのが、その翌年のことであつたから、いよいよこの分野にも広く関心が注がれるようになってきたものと喜ばしく思っていたのである。

「オール・プリユット・ジャポネ展」は日本財団が障がいの者の芸術活動の支援事業として、作品を所蔵して全国を巡回させている企画。今回の

「オール・プリユット・ジャポネ」展

会場、かわら美術館では六十三作家、約三〇〇点の展示があり、それぞれの作品が繰り出す驚くべき創造力と変幻自在な価値観は、表現とは何かという根源的な問いを投げかけてくる。社会的な固定観念や先入観を取り払い、一点一点の作品と無心に対峙してゆけば、魂の叫びや無意識から生まれ出る多様な表現とじっくり向き合える展覧会である。

今回の展覧会が、一過性のブームで終わることのないよう、今後も様々な方法によって継続され、広く紹介される機会が望まれる。その観点からも、同じく日本財団が運営する滋賀県近江八幡市にある「ボードレス・アートミュージアムNOMA」の活動からは目が離せない。



今年四月に発売された新書で、考古学・古代史の話題の争点「邪馬台国」について研究の現状をまとめられたものです。書評も好評で新聞各紙で取上げられていました。畿内説・九州説未だに結論を見ず諸説が飛び交っている状況ですが、近年の奈良県桜井市の纏向遺跡（まきむく）の発掘、箸墓古墳（はらふか）の調査などからは畿内説の分が良いようです。そんな邪馬台国についての一書を古墳研究の碩学として知られている大塚先生がものにされています。そのこと自体が一時代前なら奇異に感じられることなのですが。

大塚初重『邪馬台国をとらえなおす』講談社現代新書

なりつつあります。倭人伝の記述も、箸墓古墳が卑弥呼の墓かと問題にされるように、弥生時代末から古墳時代への転換点として理解されるようになってきています。その研究の変化を大塚先生は完結にまとめられています。しかし先を急ぎません。「考古学とはつねに新しい事実によって古い常識が書き換えられていく、そういう学問だ。」「思考の基盤は『モノ』であり考古学的事象である。」と諭され、新しい遺跡・遺物の発見により大きく歴史が書き換えられる可能性が大きい学問であるが故、絶えず慎重な姿勢を持ち続けるべきという先生の信念が伝わってくる本です。

魏志倭人伝に描かれた二世紀から三世紀前半にかけての邪馬台国と其の周辺の姿は、これまで日本における弥生時代、特にその後期の様相を語る好資料として位置づけられ、考古学では多くの弥生時代研究者により取上げられてきていました。しかし、一九八〇年代、木材の年輪年代法による年代比定の活用以降、炭素同位体によるC14年代法にAMS法が新たに導入され、弥生時代の年代が百年から五十年遡るとされるようになり、今では定説と



COLUMN & TOPIC

「あいちトリエンナーレ2013」

を来年に控え、岡崎市ではプレイベントとして「岡崎アート&ジャズ2012」(二月二日〜二月二日)を開催します。街中でアートの企画展示とジャズのイベントを行うのですが、そのアート部門に関して、現在、こちらで準備を進めていて、メイン会場には、康生にあるシビコ六階(旧レストラン街)・屋上と岡崎城内の東隅櫓、それにオープンしたばかりの旧本多忠次邸を予定しています。

三〇代半ば以降の世代にとって、シビコはある種の懐かしさ、郷愁を誘う場所ではないでしょうか。空洞化が進む康生地区ですが、かつては買い物映画、ボーリング、プールと楽しさを求めて多くの人が訪れ、シビコはそんな時代の一つの中心でした。ご他聞にもれず、私も本屋やレストランに通ったことを覚えています。そうした多くの市民が共有する賑わいの記憶―失われた過去の思い出を頼りに、シビコ会場では、六組の作家たちに街や遊び場の記憶をテーマに作品を制作してもらう予定です。また東隅櫓では、岡崎が謳う「歴史の街」に相応しい、重厚感のある作品

空間を出現させます。

街が多くの人の記憶や時間の複合体であるのとは対照的に、日本多邸は本多忠次という一個人が、七〇年にわたり愛着を持って暮らした非常に私的な場です。そこで日本多邸では、三人の作家の方々に、そうした個人的な空間ならではの親密な物語を展開してもらう予定です。

全会場に共通するのは、重層化された時間や記憶。作品は、私たち一人ひとりの思い出に寄り添いながら、共感やかつての楽しみを呼び覚ましてくれることと思います。

同じ時期、美術博物館でも連携事業を行います。是非、あちらこちらとご覧いただければと思います。



岩崎貴宏《フェノタイプ・リモデリング(広島)》2010年

INFORMATION

旧本多忠次邸復原記念

徳川四天王本多忠勝と子孫たち —岡崎藩主への軌跡—

7月7日(土)～8月19日(日)

■講演会

7月14日(土)「長篠合戦図屏風に描かれた本多忠勝」

原史彦(徳川美術館学芸部課長)

8月12日(日)「岡崎藩の財政改革」

堀江登志実(当館学芸班長)

■講座

7月8日(日)「近代の新しい住宅—本多邸建設に込められた熱意」

千葉真智子(当館学芸員)

7月22日(日)「本多家の刀剣の魅力」

杉浦良幸(刀剣研究家)

■学芸員による展示説明会

7月16日(月・祝)、8月11日(土)

*いずれも午後2時から

■ワークショップ

7月29日(日)、8月5日(日) 夏休み子ども教室「本多忠勝を知ろう！」

小学4～6年生対象(保護者の同伴可)。定員20名。参加無料(ただし保護者の方は観覧会チケットが必要)。

申込方法: 復原はがきの「往信用裏面」に①ワークショップ名②希望日③保護者の郵便番号・住所・氏名・電話番号④子供の氏名(ふりがな)・学校名・学年、「返信用表面」に保護者の郵便番号・住所・氏名を明記の上、7月10日(火)必着で、当館「夏休み子ども教室」係宛にお送りください。

*グループでの申込は4人までです。

*いずれも午後1時30分～4時30分

■演武

7月25日(水)、8月9日(木)「葵」武将隊見参!

グレート家康公「葵」武将隊が、当館にて演武を披露。

*いずれも午前11時から

水野美術館コレクション名品展

近代日本画を築いた巨匠たち —横山大観から平山郁夫まで—

9月1日(土)～10月21日(日)

■講演会

9月23日(日)「水野美術館コレクションからみる 日本画140年の歩み(仮題)」

島田康寛(立命館大学大学院教授)

■学芸員による展示説明会

9月16日(日)、10月8日(月・祝)

*いずれも午後2時から

高山新発見

先日、母と高山へ出掛けた。ここ二、三年、お花見やスノーボードなどを楽しみに毎年のように旅行してはいたが、母と訪れるのは初めてだったので、親子水入らずの旅を楽しんだ。

名古屋駅からワイドビューひだに乗り、浜谷や新緑を楽しみながら約三時間。途中雨にも降られたが、快晴の高山へ到着した。気候が岡崎とは一ヶ月程ずれているため、五月半ばにもかかわらず、八重桜を発見。肌寒くもないが、暑すぎることもない、気持ちのよい天気だった。

せっかく来たのだから高山を堪能しよう、ということ、まずは高山ラーメンを。その後、飛騨牛ソフトクエ、飛騨牛串、飛騨牛乳ソフトクリーム、みたらしだんご。景色や風情そつちのけで名物を食べつくす自称グルメ親子…もちろん、古い町並みや高山陣屋など、観光も忘れず楽しんだ。小京都とも言われる古い町並みには高山祭りの山車を格納する蔵、昔ながらの漆器店など、普段見られない風景があり、新たな発見もありつつ、町並み自体の景色にも癒された。陣屋では、時代劇で見るとような代官所や古民家を見学。何度も訪れてはいたが、今回はゆつくりと高山を堪能できた旅であった。都会の喧騒を離れ、のんびりしたい方には、高山への旅をぜひオススメしたい。(佐)

おしゃべり、あれこれ。

美術館の密かな楽しみ

美術館や博物館へ行くとき、密かに楽しみにしているのが、美術館に併設された食べ物屋さんに入ることです。

一口に食べ物屋さんといっても、お抹茶だけのところから洒落たカフェ、本格的な料理店まであります。出てくる料理の内容もですが、場所もバラエティに富んでいて、愛知県美術館にあるとあるカフェは展示室から高く、しかも廊下から少し見えにくいところにあるので、どこにあるのかわからず迷ってしまったり、昭和美術館のお抹茶とお菓子がいただけるところは、外から眺める景色が「ここは本当に名古屋か?」と思うほどの緑にあふれかえっていたりします。

徳川美術館に併設されている徳川園にはフランス料理店があります。入ろうと思うといつも予約いっぱい。ところがこの間、だめもとでフランス料理店へ行ったら、たまたま席が空いているとのことなので、ものためしに食べてみることにしました。平日でしかも値段が高い(平日ランチの最低価格が2,500円)にもかかわらず、ほぼ満席の盛況。「いったいどういった人たちが食べているんだろう?」と思いながら、店の隅でランチを食べていました。(典)

編集後記 | 東公園に復原された「旧本多忠次邸」。昭和2年建設のこの洋風住宅は、「こうしたい!」という施主の思いが伝わってくる愛らしい建物です。当館からの帰りに是非お立ち寄りください。昭和初期は、豊かになってゆく社会のなかで、家族のための新しい住宅が求められた時代でした。社会のあり方が大きく変化した今、私たちは異なる価値観のなかで、「住まう」ということについて、改めて考えるときにきているのかも知れません。(千葉)

表紙図版: 黒系威胴丸具足(部分)個人蔵



開館時間 午前10時～午後5時

*最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第53号 2012年7月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA